デカルトの筆遣い

一

「お前、絵が下手くそだなあ」

そう言って、ふわふわの金色の髪を揺らしながら、目の前で俺の描いた絵を真っ二つに切り裂いた。

そんな中学の経験以来、俺はハーフも絵も大嫌いだ。

なのに、神様は意地悪で、就職が全滅して親戚のコネでなんとか潜り込んだ勤め先はよりによって芸術大学だった。

事務員だから、さほど芸術的なことには関わらないで済んだけど、神様の意地悪はそれだけに留まらず。

「これ、デカルト君に渡してきてくれる？」

俺よりずっと先輩であり、同じ事務員の中年女性に茶封筒を渡されて、すぐには受け取れなかった。

「そんな顔、するんじゃないわよ」とかるく茶封筒で手を叩かれたのに、しかたなく受け取る。

でも、すぐに立ち上がる気になれなくて、茶封筒を忌々しそうに見ていたら「まあ、気持ちは分かるけどね」と先輩事務員は煎餅を齧った。

できるだけ芸術のことに関わりたくなくて、事務室にひきこもりがちの俺でも、デカルトのことは知っていたし、校内で見かけたこともある。

ただでさえ目立つところ、私的な因縁もあって、つい目をやってしまったのだ。
ヒヨコの産毛のようなふわふわの、その金髪を。

デカルトは学長の愛人の息子だという噂だった。

背が小さく冴えない顔をした爺さん学長の血を引いているとは思えないほど、西洋の彫刻のような均整のとれた肉体をして、肌が白く瞳は緑、そして金髪というばりばりの白人だし、顔も少女漫画風の美青年ときている。

容姿だけでも男として引け目を覚えるが、画家として才能が評価されているとなれば、個人的には忌々しい限りの存在。

「正直、そんな関わりたくない相手だけどね。
デカルト君てば、書類の提出とか必要な手続きとか、学費の支払いとか、よほど催促しないとしてくれないんだもの。
どうせ、これからしょっちゅう催促することになるんだから、今から慣れておかないと」
他の学生ならともかく、デカルトへの対応だけは先輩事務員専属になってほしかったが、先輩事務員が事務室を空けることもあるし、社会人ともなれば、こんなことで、いちいち嫌とも言ってられない。
それにしても「はい・・・」とすこしも気乗りしないで、うな垂れながら事務室を後にした。
芸術大学だから、そこかしこに絵画が飾られている。

それが視界に入らないように、微妙に視線を下げながら早足に廊下を歩いていき、先輩事務員に教えられたアトリエに向かった。

廊下沿いに小さい部屋が並んでいるアトリエは、予約を入れておけば、学生個人で貸し切りに使える。
はずが、デカルトに限っては学長の愛人の子ということで、特別待遇なのか、予約なしにずっと一室を貸し切りつづけているとか。

デカルト専用のアトリエになっているわけで、本人は一日のほとんどをそこで過ごし、泊まりこむこともあるとの話だ。
それだけ熱心に創作活動をしているのなら、さぞかし数多くのカンバスが部屋に所狭しと置かれていることだろう。

ついアトリエの室内を想像してしまい、げんなりとしながら、なんと

か部屋に入らないで済ませられまいかと考えているうちに、廊下の突き当りにある部屋の前まできてしまった。
よりによって、扉は開けっ放しになっていた。

あまり部屋の中が見えない位置から「デカルトさん」と声をかけるも、返事がない。

茶封筒を部屋に投げこんで帰りたかったけど「よほど催促しないと」と先輩事務員が言っていったからに、手渡しして改めて説明をする必要があるだろう。

茶封筒を握りしめたくなるのを堪えて、おそるおそるドアの敷居の前まで足を運んで「デカルトさん」ともう一度呼ぶ。
がたん、と大きな物音がしたのに顔を上げたら、部屋の中のとんでも

ないものが目に入った。

裸の女性がいた。
しかも、ＳＭチックに縄で縛られていた。

目が合ったなら、彼女がぎょっとした顔をして椅子を引き、その物音で我に返った俺は「すみません！」と言う間もなく、背を向けて走りだそうとした。

が、強い力で肩を掴まれて、上体がやや引き戻される。
駆けだそうとしていた足が宙を空ぶって、後ろに倒れそうになったところ、なにかがクッションになって背中を支えてくれた。

壁などの素材に比べれば柔らかく弾力のあるそれに嫌な予感がして見

上げれば、思った通り、金髪をふわふわさせながら、あどけなさそうに俺を覗きこむ眩い緑の瞳があった。